

マリの里山の現状

榎本 肇

マリの里山とは...

日本の里山では、薪炭材や建材が伐採され、落ち葉や草を耕地の肥料の原料として集められてきました。また、四季を通じて豊かな生態系の中から動植物を様々な目的で利用してきました。

一方でマリの里山とはどんなものなのでしょう？

近年のマリの典型的な里山は村と村の間にある灌木林です。かつては中高木も多く混じった森林が広がっていたのですが、人口増加と都市化の影響で都市に向けた薪炭のためにそれらが伐採され、殆ど灌木だけが残る森林となりました。また、残された灌木林もその再生が十分になされない（枝が十分に太くならない）うちに切られてしまうので、ますます森林が劣化していきます。



典型的なマリの里山～灌木と数本の中高木が残る～

マリの里山では日本と同じように、薪炭や建材だけでなく、食材や伝統薬、家畜の飼料、工芸の材料などを得てきました。

耕地も重要な里山の一つ

日本では耕地には木一本生えていませんが、マリの耕地には多くの有用樹が残されています。

地域により残される樹種は変わってきますが、マリ南部の耕地ではカリテ（シアバターノキ）が多く残してあります

カリテからは油脂が採れますが、他にも実や葉が食用になったり、家畜の飼料になったりする有用樹があり、人々の生活を支えています。



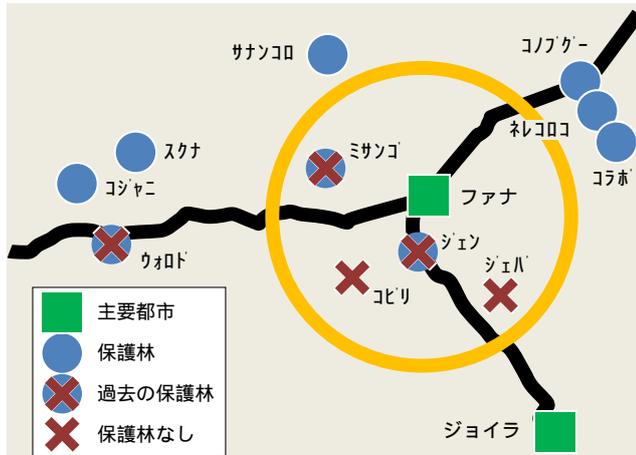
カリテ（シアバターノキ）が残された穀物畑

また耕地で耕作された雑穀などの作物は、穀物を収穫した後、茎葉が畑に残されます。そこへ家畜を放して茎葉を食べさせます。家畜は畑の中で糞をし、それが翌年の作付けの肥料となります。樹木からの落ち葉も含め、完結した物質循環が、アグロフォレストリーという西洋の概念が生まれる前から形作られていたのです。

都市を中心として衰退する里山

里山としての灌木林から切られる薪炭は、自家消費もされますが、多くは都市に運ばれていきます。首都のバマコはもちろんのこと、多くの地方都市でも都市化が進み、人口が増加し消費が増えています。そのため都市の商人などが農村部で買い付けたり、あるいは直接伐採に赴いたりして、薪炭を確保し販売しています。

ファナ地域でも、ファナを中心として同心円状に里山の衰退が広がっているのが分かります。



ファナ周辺の保護林の現状

一方で、幹線道路から奥に入っていく村では、まだ中高木が残されています。特に道の管理が悪かったり、細い道であったりするところでは、車のアクセスも悪いためです。また、村の密度も少なく、それだけ森林への負荷も少ないこともあります。

里山保護に取り組む村々

近年、里山の一画を伐採禁止とし罰則が規定されている保護林を設置する村がでてきました。保護林は、行政が主導して設置する場合もあるし、様々な里山の衰退に危機感を持った村人たちが自主的に設置する場合があります。前者の場合、区画として設置した後、見廻りもされず罰金も科せられないものもあり有名無実化しているケースもあります。また保護林として設置したものの、薪炭の供給が十分でなく、やむなく住民が伐採を始め、それが呼び水となり都市部から商人の商業的伐採が始まるケースもあります。

いずれにしても、保護林として森林を守っていくためには、村内はもちろんのこと、周辺村への周知も必要となり、その調整には行政の役割が大きいといえます。



中高木が良く育っている保護林

サヘル森として何が出来るか？

今回の滞在では日程の関係上、数カ村での聞き取り調査しかできず、地域としての保護林の実態はほんの一部しか分かりませんでした。しかし、ファナ地域では考えている以上に保護林を設置している村が多いという印象を得ました。

現在の保護林は、村人（主に猟師）による見廻りで伐採を監視し、罰則を設けることで伐採を予防しています。バマコの南部地域では、こうした保護林内に過去 NGO などの支援により植林を施した例もあり、サヘル森が提供した苗木も共同林として植樹されていました。



NGOの支援で保護林内に植えられたユーカリ

これから、さらに保護林の実態を把握していくとともに、例えば、既存の灌木に土壌改良や施肥をして生育を促したり、置石などを施して雨水の地下浸透を促したり、取り木・根萌芽など株数を増やしたりするなど、保護林の質を高めていくような活動を村人共に行って行ければと思っています。

2014 苗木は育っているか

代表 坂場 光雄

北部州の治安悪化やマリ国内の混乱で、昨年まで2年間の現地活動は日本人不在の中、マリ人スタッフ主体で進められてきました。現場では本当に苗木は育っているのか？坂場代表からの報告です。

マリでの活動は、村や地域、学校等を訪ねて、苗木配布を中心に、試験植林、地域苗畑への資材協力、植栽指導等を行っている。

2011年には、地域苗畑での苗木生産とその周辺での苗木配布の組み合わせがうまく機能し、1年間で4万本を超える苗木が配布・植林された。

しかし、その後の治安の悪化で、2012年、2013年は大部分がマリ人スタッフのみで、限られた地域での苗木管理等の活動になった。

苗木の配布・植林の本数

西暦	苗木配布・植林の村・地域・学校等のか所数	苗木本数
2010年	131か所	37,540本
2011年	129か所	42,760本

2014年の治安の回復を受け、苗木の生産がしやすい5月から日本人スタッフを派遣し、ファナ地域やバマコ南部を中心に、苗木配布の活動が再開された。しかし、2年間の空白のため、マリの地域苗畑が十分に機能せずに、苗木生産が遅れていた。

苗木は生き物で、種をまき、ポットに植えて管理を続ければ2か月ほどで配布できる大きさになる。大きくなりすぎれば、根を切ったり、枝を切り詰めたり、掘り上げたりする管理が大変になる。このため、地域苗畑では生産を控え、購入者の顔を見てから、改めて苗木を作り始める人も多い。



育ち過ぎの苗木は掘り取りが大変



トラオレ氏の管理で生育した植林木

また、以前はバマコの市内の苗木屋から苗木を購入していた。今回、購入した苗木を自動車に積んで、乾燥防止のためにシートをかけて市街地を走行すると、警官の検問で止められ、難癖をつけられて、金を要求されることが何度もあった。このため、市街地の苗木屋での購入は途中からほとんど行わなかった。

そのため、わずかの量の地域苗畑の苗木は、底をつき、5月末～7月末の2か月で配布できた数量は、51か所、1万2千本余であった。

村人の苗木に対する意欲は相変わらず高い。苗木をもらいに来る村人の勢いはすごい。これは少しずつながら配布した苗木の効果も出てきていると思われる。樹種にもよるが、パイアは、よく生育すれば2年目には実が収穫できる。ユーカリは3~4年で小さな支柱が取れる。菜園で自主的に何種類かの苗木を作り始めた村人にはポット用袋、種子などを提供し、意欲が持続できるように支援した(マッサコ村)。



自動車に押し寄せる人々(ソロ村)



2010年配布のユーカリ(ニアニナ小学校)

このような中で、これまでに訪れた村を再訪すると、以前にももらった苗木が大きくなったから、見に来いとの声がかかる。苗木は配布した数が多く、それぞれの家や菜園、農地、休耕地などに植えられており、全体の把握は難しい。村を訪ねて家の周りを見ると、木柵で囲われた菜園内で生育する果樹類やバオバブも増えているようで、徐々に小さな緑の塊が出来ているように感じる。マダムが何人もいる大家族では、それぞれのマダムの菜園で果樹を植え込んでいるところもある(テニャンブゲー)。



2011年配布の果樹(ボディゲンドウ村)



2011年配布のバオバブ(タンバブゲー)

問題点もある。配られた苗木が菜園の中に植え忘れられていた。6月頃は雨季の始まりで、農作業に非常に忙しい時期であるが、緊張感を持たせるために没収し、他の村に再配布した。

家畜の食害も大きい。農地のわきに若者と一緒に40本の苗木を植えたときに、柵をしろという、作付けの季節で農地にはヤギ・ヒツジは来ないという。3週間後に訪問すると、すべて葉が食われていた(タジャナ村)。

ただ、軸が残っていたので再生の可能性はある。今後の家畜との共存に期待したい。

マリ共和国におけるエボラ出血熱の状況

代表 坂場 光雄

マリでの感染はギニアからの2系統

日本でも大きく報道されているように、西アフリカの3か国（リベリア、シエラレオネ、ギニア）で死者が約6千人、感染者が1万6千人以上と、エボラ出血熱が猛威をふるっています。ギニアと国境を接するマリでも10月下旬に第1号の感染者が見つかり、現在までに8例の感染（うち6名が死亡）が報告されています（WHO、12/2 現在）。いずれの感染者も、ギニアから入国した2名の感染者のいずれかに治療や見舞いで深く関わった人物とその家族などでした。この他に感染者に接触した500名以上の人々も、マリ当局やWHOなどの国際機関により観察措置が取られ、その半数以上は潜伏期間を過ぎています。

エボラと戦うマリ

マリ国内では、エボラ出血熱に関する啓蒙が様々なメディアで行われています。石鹸や消毒液などによる手洗いが奨励され、感染を予防しようと皆実践しているそうです。また空港や国境などではサーモグラフによる体温の監視がおこなわれ、国境を通過する乗客は手洗いと靴底の消毒を行っています。国際機関と協力し、水際で新たなエボラ出血熱の発生を食い止めようと対策をとっています。なお、12/12に健康の危機に関する国際会議が日本でも開かれ、エボラ拡大阻止が重要な議題になりました。

サヘルの森の活動は？

マリでのエボラ出血熱患者の発生を受けて、サヘルの森の活動に関してもどう対処すべきか話し合いました。現在、マリでの感染源は限定され観察措置が取られており、新たな感染に対する対策も取られていることから、感染が拡大していかない限り、日本人の派遣を含め活動は継続していきます。現場では、感染のリスクの高い施設にできるだけ近づかない、手洗いを徹底するなどできる限りの対策を行います。また、日本人スタッフの帰国に際しては、健康状態の自己チェックや医療機関の確認など行うとともに、厚生労働省の指示に従います。

日本人スタッフ、関係者の渡航状況

- ・榎本肇：9/10～10/18
- ・小島通雅：9/20～10/30、12/19～2/24（予定）



【エボラに関する厚生労働省の指示】

ギニア、リベリア、シエラレオネに、過去1か月以内に渡航された方は、入国時に必ず申し出ること。

全ての入国者・帰国者に対して、各空港会社の協力も得つつ、症状の有無に関わらず、過去21日以内の西アフリカ1か国（ギニア、リベリア又はシエラレオネ）の滞在歴を自己申告するよう呼びかける。

西アフリカ3か国（ギニア、リベリア、シエラレオネ）への21日以内の滞在歴が把握された者については、入国後21日間は1日2回健康状態を確認する（健康監視）。

（同省HPより抜粋）

西アフリカのエボラ流行国とマリ的位置関係

講演会がきっかけで

戸本 喜文(会員番号 1022)

私の会員番号は 1022 番です。運営委員の中でも番号はかなり後ろの方ではないかと思われま。またマリの現地に行ったことのない運営委員でもあります。現地もよく知らない私が現在サヘルの森の運営委員になっていることが自分でも少し不思議な気がします。これも縁のなせるわざなのかもしれません。

私が初めてサヘルの森と出会ったのは大学時代でした。私は某工業大学の工学部出身で機械科を卒業した後、また同じ大学の電気科に学士入学したりして一般の人より長い大学生活を送っていました。

かつては大学紛争でも多少は有名であったらしいのですが、諸先輩たちも後輩を育てず大学を去って行き、学生の自治活動がかなり衰退していた時期に私の学生時代がありました。自治会役員のなり手もないためクラブサークル団体出身の私が担ぎ出されて学生自治会の副委員長やら委員長なんかやらされていました。政治色はほとんどなく対大学と老朽化したクラブサークル室の改善要望とかしたりして、まあ学生にとってのよろず相談窓口みたいな存在でした。

自主ゼミ活動にも力を入れており環境問題(当時は地球温暖化問題や環境ホルモン、熱帯雨林の減少とか地球の砂漠化なんかが注目されていた時でした)なんかに積極的に関わっていましたが、大学には年に1回学園祭というものがあ、講演会企画なんかも担当していました。今年は何をやるかなという時に後輩の石川君という学生から自分が最近会員になった西アフリカで植林活動しているサヘルの会(当時)という団体があり是非その会の講演会をやるかと提案されました。

当時、朝日新聞に大きく取り上げられた記事を見せてもらった記憶があります。確か執筆は当時有名記者であった石さんのものだったと思います。というわけで石川君経由で交渉して当時サヘルの森の事務局長の杉野さんがうちの大学に来て講演してくれることになりました。

かなり真面目な学生とか先生は来てくれましたが、それほど大人数でなかったのは少々残念でした。まあ学園祭みたいなお祭りの一環ですからあまり期待するのは無理だったかもしれません。

杉野さんは例のひげもじゃの風貌で、かなり面白い話が聞けました。パネルの写真も多数貸し出してもらえ、杉野さんの説明もあり現地の状況が理解できました。その後うちの大学でも2~3回くらい学園祭でミニ講演会とかパネル展示をしたと思います。そのうち石川君の勧めもあり私も会員になり、代々木上原の事務所(当時)にも出入りしたりして、いつの間にか運営委員にもなって現在に至ります。当時の事務局員は高津さんと榎本雅子さん、その後亀山さん、梶原さんといった顔ぶれでしたか。いろいろお世話になりました。

会員になった当時は国際ボランティア貯金全盛期で多くのNGO団体や活動があり、またチャリティーウォークラリーなんかも盛んで多くのNGOの方々の話が聞けたのがとても勉強になりました。当時の代々木上原の事務所には会員・非会員問わず多くの方が出入りしており、かなり熱気のある雰囲気でした。

実家(静岡)にリターンして転職したのがきっかけで静岡支部も出来たのですが、何回か静岡市内でイベントを開催したくらいでまた仕事の関係で東京に舞い戻ってしまい静岡方面での活動は現在、休止状態です。

最後にバブル崩壊前の工学部出身ということもあり当時の私も環境問題等には関心はありましたが、科学万能主義に毒されていた気がします。アフリカの砂漠化問題なんかも技術や資金が解決するのではないかと思っていました。でもサヘルの森との出会いでそうではないと考えるようになりました。マリの人達は日本人に比べればお金もないし文化的な生活もしていないかもしれません。でも日本人以上に力強く人生を楽しみ、お金がなくても身の回りにあるものを有効利用して自然に優しい生活をしているのですから。

願わくばサヘルの森の活動がマリの人々の助けになることを心から祈念します。

...会員番号は整理のための数字ではない。会員番号にはひとつづつのドラマと息がある。今は欠番の人の思いも積み込んで、会は前に進んでいきます。(サヘルの森)

国内活動報告(7~11月)

< 報告会・講演 >

- ・9/15 坂場帰国報告会(町田市民フォーラム)

< イベント >

- ・7/27 キッチンサヘル(瀬谷地区センター)
- ・10/4~5 グローバルフェスタ(日比谷公園)
- ・10/26 みなこいワールドフェスタ2014(長野県駒ヶ根市)
- ・11/1~2 ジャパン・バードフェスティバル2014(千葉県我孫子市)
- ・11/16 第8回市民協働フェスティバル「まちカフェ！」(町田市役所)

< 定例活動 >

- ・7/19 東京薬科大薬草園、里山公園
- ・9/20 荒川知水資料館、荒川赤羽桜堤緑地
- ・10/18 哲学堂公園、新井薬師
- ・11/15 多摩川台公園、宝来公園

みなこいワールドフェスタ 2014 (10/26)に参加

10月26日(日)に長野県駒ヶ根市で開催された「みなこいワールドフェスタ2014」に参加しました。駒ヶ根市には国際協力機構(JICA)の派遣前訓練施設があり、毎年秋に国際交流・国際協力イベント「みなこいワールドフェスタ」が行われています。1週間以上続くイベントのメインである「こまがね国際広場」に今年も出展しました。ちなみに『みなこい』とは宮田村、中川村、駒ヶ根市、飯島町の4市町村の頭文字をとったものです。

当日は、台風の影響もなく気持ちの良い天気の日でした。今年のJICAボランティアはシニア隊員候補の男性2名と青年海外協力隊員候補の女性1名の3名で、物販やスタンプラリーのクイズ出題のお手伝いをさせていただきました。

今年で12回目の参加となりますが、商店街を会場に市民が中心となって企画・運営されるこのイベントは地元密着度も大きく、また、訓練中の候補生や協力隊OB・OGの参加割合が他に比べて著しく多いこともあり、他とは少し違った雰囲気を感じられます。派遣を控えた候補の方々の熱心な姿勢に、いろいろと刺激を受けられる良い機会となっています。

中央・南アルプスの紅葉の素晴らしい季節でもありますので、皆さまにも紅葉狩りがてら是非一度遊びに来ていただければと思います。(榎本雅子)



こまがね国際広場にブースを出展

まちカフェ(11/16)に参加

11月16日(日)に東京都町田市(町田市役所)で開催された第8回市民協働フェスティバル「まちカフェ！」に参加しました。

町田市を中心に活動している市民や地域貢献団体の方たちと共につくる、『市民協働』をテーマにしたお祭りで、今回も80以上の団体が参加・協力したほか、体験コーナーや講演会などに3000人以上の来場者がありました。

当日は市役所のフロアがイベント会場に早変わり。派遣スタッフが買い付けてきた泥染めのタペストリーや、ビーズアクセサリーで楽しい雰囲気のブースに仕上がりました。

「アフリカで木を植えている団体です。」と言うと、「え！アフリカ!？」と驚きつつも、熱心に話を聞いて下さる方も多くいました。

今回はアフリカの太鼓「ジャンベ」モチーフのキーホルダーがよく売れました。過去に習っていたという方もいて、そういうお話ができるのもイベント参加の魅力の一つです。

サヘルのブースでは、マリ(アフリカ)の文化や植物の話が聞けると好評でした。(原梓)



町田市役所がイベント会場に変身

榎本肇 帰国報告会

「アフリカの里山をまもる 生活を支える林を育てながら...」

マリ共和国では都市化が進み、周辺の農村部から薪炭材が伐採され、里山が衰退してきています。近年、危機感から村人自身がこの里山の保護に乗り出す動きもあり、サヘル^①の森も苗木を配布してこの生活を支える林を再生する支援をしています。今回は、10月に帰国した榎本肇がマリの里山の現状と再生に向けた取り組みをご報告します。

日時：2015年1月25日(日)
14:00～16:00(13:30開場)
会場：JICA地球ひろば2F大会議室
東京都新宿区市谷本村町10-5(JICA市谷ビル内)
電話：03-3269-2911(代表)
最寄駅：JR中央線・総武線、東京メトロ有楽町線・南北線、都営新宿線「市ヶ谷駅」徒歩10分
報告者：榎本肇 資料代：500円
主催：特定非営利活動法人 サヘルの森

ブログ始めました

サヘルの森スタッフブログを開設いたしました。ブログのURLは下記の通りです

<http://sahelnomor.exblog.jp/>

スタッフブログでは、現地で行っている活動はもちろん、日本国内で参加する様々なイベントのお知らせや報告を行っています。写真をたくさん載せていますので、遠方でなかなか活動に参加することが難しい方にも楽しんでいただけたらと思います。

特におすすめの記事は、マリ現地レポートです。今年度から再開した日本人派遣の様子がよくわかります。

国内では、定例活動の様子が毎月写真付きで詳しく報告されています。普段何気なく暮らしている東京をゆっくり自然観察しながら歩くと色々な発見があります。写真だけ見ると東京にいるのがわからないほど自然がたくさんあることに驚きます。

これからも月に数回更新しますので、時々覗いていただけると嬉しいです。(原梓)

定例活動

12月20日(土)10:30集合
赤門、三四郎池、根津神社
江戸時代の史跡と漱石ゆかりの池を訪ねます。
JR中央線・御茶ノ水駅西口改札
1月18日(土)10:30集合
日本橋七福神、日本橋
日本の道路原票と歴史ある町を訪ねます。
東京メトロ半蔵門線・水天宮前駅水天宮方面改札

クリスマス募金のお願い

年末恒例のクリスマス募金へのご協力をお願いいたします。ツリーにはサヘル地域の安定化への願いを込めたいと思います。



振込用紙を同封させていただきました。また、本年度会費がまだの方は、納入下さいませようお願いいたします。

会費納入にご協力ください

NPO法人『サヘルの森』はサハラ砂漠の南縁サヘル地域において植林活動を行う市民団体です。会員には機関誌『サヘル』が届きます。お申し込みは、郵便振替で下記の口座に会費をお振込みください。

- ・一般会員 年 5,000円
- ・維持会員 年 20,000円

特定非営利活動法人 サヘルの森

住所：〒194-0013 東京都町田市原町田1-2-3
アーベイン平本403 (株)エコプラン内
TEL:042-721-1601 (留守電対応)
FAX:042-721-1704
郵便振替口座:00170-6-115054

HP:<http://www.jca.apc.org/sahel-no-mori/>
BLOG:<http://sahelnomor.exblog.jp/>
E-mail:sahel-no-mori@jca.apc.org

機関誌『サヘル』No.95 2014年12月15日発行
発行人:坂場光雄 / 編集:高津佳史
